第十八條ハ被告人ニ許スニ損害ノ要償ノ權ヲ以テセシモノニシテ是當ニ免除無罪又ハ不問ノ言渡ヲ受ケタル場合ニ於テ其訴訟ノ原由ハ告訴人告發人又ハ民事原告人ノ惡意又ハ重キ過失ニ出デタル時ノミナラズ假令ヒ被告人刑ノ言渡ヲ受ケタルト雖ヒ告訴人告發人ニシテ被告ノ犯罪ノ所爲ニ付キ過實ノ申立ヲ爲シタル時ハ亦之ヲ許セリ

第二十一條乃至第二十三條ハ此法典ニ因リテ定メタル期限ヲ計算スルノ法方上ハ一艘ノ規則ヲ置キタルモノナリ第二十四條乃至第廿六條ハ送達ニ要スル方法第廿七條及ビ第二十八條ハ總テ官吏カ書類ヲ作ル手續ヲ規定シタルモノナリ

第一編ハ刑事裁判所ノ構成及ビ管轄ハ當テ我立法者ノ或ハ我法典或ハ我特別法律ニ於テ定メタル所ノ規則ヲ以テ全ク此編ニ列序セシヲ見ル即チ其通則ニ於テ次第ニ連續ヲ說明シタルハ我法典同シ但シ之ヲ我法典第二百二十七條ノ如ク犯罪ノ階級ノ處ニ於テセサルノ異アルノミ

第四十一條乃至第四十四條裁判所ノ管轄ヲ規定シ凡ソ犯罪ヲ審案スルハ其罪ヲ犯シタル地方裁判所ノ管轄ナリトス然リ而シテ左ノ場合ニ限リ捕獲地方ノ裁判所ヲ以テ其管轄ナリトス即チ第一犯罪ノ地方分明ナラサル時、第二數箇ノ裁判所管轄內ニ於テ同時ニ又ハ繼續シテ同一ノ罪ヲ犯シタル時、第三數箇ノ裁判所管轄內ニ於キテ數箇殊異ノ罪ヲ犯シタル時是ナリ第四十四條數箇ノ裁判所管轄アル場合ニ於テ被告人ヲ補獲スルヿ能ハス又ハ法律上捕獲スルヿヲ許サル時ハ最初豫審又ハ公判ニ着手シタル裁判所ヲ以テ其管轄ナリトス」

第四十九條乃至第五十四條治安裁判所ノ判事裁判官、檢察官、書記ノ爲ニ特別ナル裁判權ヲ設ケ通常規則ノ例外タル必要ノ訴訟手結ニ因ルモノトス

第五十六條乃至第六十條ハ裁判管轄ノ規則ニシテ亦我法典ノ規則ニ異ナラス然レ𪜈我法典ニ比スレハ理解平易ニシテ適用普通ナル原則ヲ設置シタルモノト謂フ可シ

第六十二條違警罪裁判所ノ判事ノ職務ハ治安判事之ヲ行フ「ニ我法典ノ如シ而シテ本條第二項ニ於テ治安判事補ハ公廷ニ立會ヒ意見ヲ述ルコトヲ得ルモノトセリ次ニ第六十三條ノ第三項ニ於テ檢察官ノ職務ヲ行フ可キ警部差支アル片ハ警部補之ヲ行フ又其人一人ニシテ次席等ノ差支アル片ハ治安判事其職務ヲ行フ」ト爲ス

第二章ハ輕罪裁判所ノ事項ナリ第六十六條ノ第二項ニ於テハ裁判所カ重罪及ヒ輕罪ノ豫審ニ任スル規則ヲ定メ第六十七條ニ於テ輕罪裁判所判事ノ職務ト會議局ニ於テ判事全員及ヒ檢事ノ意見ヲ聽キタル上ニテ裁判所長ヨリ始審裁判所判事一名又ハ數名ニ滿一年間之ヲ委任スルモノトス然レ𪜈更ニ滿一年間其職務ヲ繼續セシムル「ヲ得但シ判事各員滿一年間該職務ニ從事セサル片ハ三度以上同一ノ判事ニ委任スル「ヲ得ス」即チ是危險ヲ保スル所ノ交迭方法ニシテ此方法ハ第七十五條及ヒ第七十六條輕罪事件ノ爲ニ聞キタル控訴裁判所ニ於テモ之ヲ適用スルモノトス第六十九條ノ第二項輕罪裁判所ニ於テモ違警罪裁判所ノ如ク豫審又ハ公判ニ立會ヒ意見ヲ述ルヲ得ルノ權力ヲ判事補ニ與ヘタリ

第七十二條司法警察官タル可キ者ヲ列擧セリ第一ハ檢事ト同一ノ權ヲ有スル者ニシテ東京警視長官及ヒ其次官ナリ各府縣ニ於テ縣令及ヒ其次官ナリ第二ハ警部長及ヒ警部郡區長治安判事及ヒ警部ノ在ラサル地方ノ戸長ナリ此條ニ於テハ我第九條ノ如ク豫審判事ニ關スル疑問アラス而シテ以上記載シタル官吏ニシテ補員アルトキハ正員ノ差支アル場合ニ於テ代理セシムルヲ得ヘシ又第七十三條ニ於ハ職務上囑托ヲ爲スノ權ト之ヲ受ケテ完全スルノ必要トハ最大區域ニ於テ定メラレタルモノナリ第七十八條ハ控訴裁判所ノ檢事長ニ許スニ其管轄地内ニ於テ輕罪裁判所檢事ニ屬スル司法警察及ヒ起訴ノ職務ヲ行ヒ或ハ其補員一ノ人ヲシテ之ヲ行ハシムルノ權ヲ以テシタルモノトス(譯者按スルニ本文第七十八條トアルハ第七十九條ノ謬カ)

重罪裁判所ハ我陪審裁判廳ノ如ク裁判長一名陪席判事二名及ヒ陪審官ヲ以テ組成セリ但シ其陪審官ハ十名ナルノミ然リ而シテ其裁判長及ヒ陪席判事ニ關スル規則ハ充分ニ危險ヲ防クノ目的ヲ以テ佛國ノ方法ニ倣ヒ寧ロ其混雜ヲモ採リタルモノナリ第八十六條及ヒ第八十九條乃至第九十一條又第四百五十四條乃至第四百六十條ハ陪審官ノ事項ニシテ該方法ニ於テ第一ハ開廷陪審官氏名目錄第二ハ裁判陪審官氏名目錄ニ因リテ二樣ノ抽籤ヲ用ヰ之ヲ定ムルモノト爲ス但シ是毎年陪審官氏名目錄ヲ整フル方法ヲ定メタル特別ノ法律ナリ檢察官ノ職務ハ第八十七條ノ規定スル所ニシテ重罪裁判所檢察官ノ職務ハ控訴裁判所檢事長又ハ其指名シタル

補員之ヲ行フ又檢事長ハ豫審ニ干預シタル檢事ヲシテ其職務ヲ行ハシムルヿヲ得若シ別段其命ナク又ハ其命ヲ受ケタル者差支アルトキハ開廷ノ地方ノ始審裁判所檢事又ハ其指名シタル補員職務ヲ行フヿヲ得ヘシ

高等法院ハ犯罪者身分ノ資格ト犯罪事件ノ性質トニ限リテ之ヲ開クモノニシテ第一編最後ノ章ナリトス

第二編ハ犯罪ノ搜索、起訴及ヒ豫審ナリ

余輩ハ特ニ告訴告發ノ事件ニ關シテ豫審判事及ヒ檢事ノ權限ヲ示ス可シ檢事若シ告訴告發ヲ受ケタル時其事件禁錮ノ刑ニ該リ若クハ更ニ之ヨリ重刑ニ該ル可キモノニシテ急速ヲ要スルトキハ假リニ檢証及ヒ被告人、証人ノ訊問ヲ爲スヿヲ得且ツ然ル後ヲ其書類ニ請求書ヲ添ヘ豫審判事ニ送致ス可シ、之ト同ク司法警察官ハ急速ヲ要スル場合ニ於テ檢証訊問ノ處分ヲ爲スヲ得然ル後ヲ其書類ヲ所屬檢事ニ送致ス可シ

第百七條ノ規定スル所是ナリ此規則タルヤ急速ノ場合ニ於テスルモノニシテ曾テ我法典ニ見サル所ナリ但シ第百十四條及ヒ第百十五條ハ我法典ヨリ假借シ來リタルモノニシテ現行犯罪ニ關スル特別規則ナリ夫レ我治罪法第百六條ノ上ニ起リタル困難ハ日本法典第百十六條ニ於テ之ヲ解除セリ故ニ其全文ヲ揭ゲテ讀者ヲシテ之ヲ知ラシム可シ曰ク公力ヲ行フヘキ官吏又ハ公力ヲ指揮、或ハ請求スルノ權ヲ有スル官吏カ職務ヲ行フニ當リ重罪又ハ禁錮ノ刑ニ該ル可キ輕罪ノ現行犯アルヿヲ知リタルトキハ令狀又ハ健捕ノ命令ヲ待タスシテ犯罪者ヲ捕獲ス可シト

凡ソ草案全部ノ論理ニ適シタル精神ハ第百二十三條ニ於テ之ヲ見ルヿヲ得ヘシ本條ハ檢察官ニ其犯罪ノ搜索ヲ終リタルトキハ種々ノ部分ニ付キ爲サヾル可ラサル手續ヲ指示シタルモノナリ而シテ豫審判事ノ職務ハ第二十九條及ヒ次條ヲ以テ詳細ニ定メタリ(譯者按スルニ本文第二十九條ハ第百二十九條ノ謬)カ立法者ハ豫審判事及ヒ檢察官ノ職務ニ付キ判然其共ニ爲ス可キト單獨ニ爲ス可キトノ場合ヲ定メ混淆ノ患ヲ慮リタルモノナリ

第百三十三條乃至第百五十五條ハ令狀ノ一節ニシテ該事項ニ於テハ草案編纂員嘗テ我法典ヲ非難シタル論議ニ左袒シタルニ非ラス故ニ余輩ハ日本法典ニ於テ同ク我四令狀アルヲ見ル即チ召喚狀拘引狀拘留狀收監狀是ナリ然レトモ此等令狀ヲ交付セサル可ラル場合之ヲ要スル條件及ヒ之ニ因リテ生スル効力ハ頗ル精細ニ規定セラル例ヘハ第百四十一條ニ於テ豫審判事ハ拘留狀ヲ執行シタルヨリ十日ヲ過グルトキハ之ヲ收監狀ニ換ヘ若クハ保証金ヲ出サシメ又ハ出サシメスシテ被告人ノ保釋ヲ許スカ如シ第百五十六條乃至第百五十九條密室監禁ハ特ニ注意シテ搆成規定シタル一款ニシテ豫審判事ノ權ハ其言渡ヲ改更スルノ場合ニ於キテ其理由ヲ裁判所長ニ上申シ且ツ其毎十日ノ監禁期限中ハ少クモ二度被告人ヲ訊問ス可キノ必要ニ因リテ制限セラル又其十日ノ期限ハ若シ更改ノ言渡ナキトキハ當然効力ヲ消滅スルモノトス

我治罪法ニ於テハ各裁判所ニ與フ可キ證據ニ關シテ散在スル所ノ規則ト各犯罪ノ階級ニ因リテ定メタル所ノ細目ノ方

法アルノミ故ニ此ヲ以テ彼ニ適用ス可キヤ否ノ問題ハ數人ノ困難ト爲ス所ナリ草案ノ編纂者ハ第百六十條以下ヲ以テ證據總則ノ一款ヲ設ケ其方法ハ心證ヲ取ルノ精神ナリ

編纂者ハ公然我法典ノ許ス所ノ審問方法ヲ採用シ之ヲ寛大ト爲スルヿ無ク寧ロ之ヲ嚴格ト爲スモノトス然レ𪜈一切其弊害ヲ除却セリ即チ第百六十四條檢事ハ被告人訊問ノ席ニ立會ヒ且ツ必要ナリトスル條件ニ付キ豫審判事ニ其訊問ヲ求ムルヿヲ得第百六十五條豫審判事ハ被告人ヲ奬勵シテ其罪ヲ白狀シ共犯又ハ從犯ヲ指定シ其他事實ニ適スル一切ノ申立ヲ爲サシムルヿヲ得然𪜈脅迫恐嚇又ハ詐言ヲ用フ可カラス第百六十八條被告人ハ供書ノ謄本ヲ求ムルヿヲ得是ナリ」

我國ニ於テ法律上論議アルモ實際ニ行ハルヽ所ノ囑托委任ノ權ハ公然編纂者ノ擴充スル所ト爲ルヲ見ル第百八十三條ニ曰ク豫審判事ハ其管轄地內ト雖𪜈輕少ノ事件ニ於テハ臨檢及ヒ家宅搜索ノ事ヲ其地ノ治安判事ニ委任スルヿヲ得ト、又第百八十四條ニ於テハ最廣範圍ノ語ヲ用ヰ被告人又ハ豫審ニ管アル者ヨリ發シ又ハ此等ノ人ニ對シ發シタル書類電報又ハ物件等ヲ差押フルノ權ヲ豫審判事ニ與フ

茲ニ著明ナル規則ハ証人ノ員數ヲ制限セシ一事ナリ第百八十五條ノ第二項ニ曰ク原告証人又ハ被告証人ノ員數、輕罪事件ニ付キ五名以上重罪事件ニ付キ十名以上ナルトキハ指名ノ順序ニ循ヒ又ハ最モ事實ヲ知ル可シト思料シタル者輕罪事件ニ付テハ五名重罪事件ニ付テハ十名ヲ限リ先ツ之ヲ呼出ス可シ但シ事實發見ノ爲メ必要ナリトスルトキハ此限ニ在ラスト」

第百九十六條證人宣誓ヲ肯セサル時ハ裁判所ニ於テ檢察官ノ意見ヲ聽キ五圓以上二十圓以下ノ罰金ヲ言渡ス可シ但シ其言渡ニ對シテ控訴スルヲ許サス第百九十七條宣誓ヲ必要トセザル者ヲ列擧シ第百九十八條宣誓ヲ許サヽル者ヲ列擧シ第二百一條出廷ヲ欠キタル者ノ如ク供述ヲ肯セザル證人ヲ罰ス但シ其職業ニ管スル秘密ノ事件ニ付キ陳述ヲ肯セザルハ此限ニ在ラズ

草案ハ鑑定事項ノ爲ニハ特別ニ一節ヲ設ク余輩ハ特ニ第二百九條ノ第二項ヲ示ス可シ該項ニ曰ク婦女又ハ外國人ト雖モ鑑定人ト爲ルヿヲ得ト

現行犯ノ豫審ハ第二百八條譯者按スルニ第二百十八條ノ誤カ及ヒ其次條ニ於テ我法典ト同一ノ主義ニ基キ之ヲ定ム而シテ第二百二十條檢事ハ豫審判事ヨリ先ニ現行ノ重罪又ハ輕罪アルヿヲ知リタル時ハ豫審判事ヲ待ツナク只其旨ヲ通知シタル上コテ重罪又ハ輕罪ノ犯所ニ臨檢シ及ヒ此章ノ規則ニ循ヒ豫審判事ニ屬スル豫審ノ處分ヲ爲スヿヲ得而シテ第二百二十二條及ヒ第二百二十三條ニ於テ司法警察官亦タ此權ノ一部ヲ行フ可キモノトス

豫審判事ハ豫審中常ニ被告人ノ請求ニ依リ豫審及ヒ公判ノ爲メ何時ニモ呼出ニ應シ出廷ス可キノ盟約ヲ爲サシメ保釋ヲ許スヿヲ得但收監狀ヲ受ケタル被告人ニ保釋ヲ許スヿハ檢察官ノ意見ヲ聽ク可シ第二百卅條ノ定ムル所是ナリ第二百三十二條保釋ヲ許ス爲ニ金圓ヲ以テ被告人ノ出廷ヲ保證セシムルヿヲ得但保證ヲ必要トスル時ハ豫審判事其金額ヲ

定メ保釋ヲ許スノ言渡書ニ記載ス可シ又第二百卅四條保証ハ單ニ其被告人ノ出廷ニ關スルノミニ過キサルヲ見ル可シ」

第六節ハ豫審終結ナリ夫レ豫審ノ中間ニ於テ豫審判事ト檢事トニ關シ前者ハ總テ其獨立ヲ守リ後者ハ嘗テ訴訟ヲ外ニセサルノ方法ニ因リ兩者ノ權利ト義務トヲ定メタル後編纂者ハ五箇豫審ノ言渡ヲ指定セリ即チ管轄外ノ言渡、免訴ノ言渡、違輕罪裁判所ニ移スノ言渡、輕罪裁判所ニ移スノ言渡及ヒ重罪裁判所ニ移スノ言渡是ナリ而シテ重罪裁判所ニ移スノ言渡ヲ爲スニ於テハ公訴局ノ設置ノ廢セラレタルカ故ニ直ニ公訴スルモノトス此等言渡ノ結果就中各人ノ自由及ヒ欠席被告人等ニ關スルモノハ余輩ノ注意ヲ要スル所ナリトス」

第四章ハ豫審ノ上訴ナリ草案者先ヅ其行爲ヲ區分シ第一管轄違ノ申立ヲ棄却シタル時第二法律ニ背キ拘留狀又ハ收監狀ヲ發シ又ハ之ヲ發セザル時第三法律ニ背キ保釋ヲ許シ又ハ之ヲ許サザル時第四總テ越權ノ處分アル時是ナリ第二百五十八條被告人ハ檢事ノ如ク故障ヲ爲スヿヲ得而シテ以上ノ故障ハ其裁判所ノ會議局ニ於テ判事三名以上ニテ之ヲ判決ス可シ又會議局ノ言渡ハ直ニ之ヲ執行ス可キモ之ニ對シテ控訴ヲ爲スヿヲ得但シ豫審終結ノ言渡アリタル後ニ非ザレバ之ヲ爲スヿヲ得スト第二百六十條ノ規定スル所ナリ其次ハ豫審終結ノ言渡アリタル時是ナリ第二百七十四條檢事ハ總テノ場合ニ就キ之ニ對シテ故障ヲ爲スヿヲ得、第二百七十五條民事原告人ハ或ル豫定シタル場合ニ於テ之ニ對シテ故障ヲ爲スヿヲ得、而シテ第二百七十六條被告人モ亦或ル豫定

シタル場合ニ於テ之ニ對シテ故障ヲ爲スヿヲ得以上ハ會議局ニ上訴スル故障ノ規則ナリ第二百八十二條第二百八十六條及ヒ其次條ニ於テ故障ニ關スル會議局ノ言渡ニ對シテハ其權限頗ル廣濶ナル高等ノ裁判所ニ控訴スルヿヲ得ルモノト爲ス余輩ハ日本草案ヲ以テ佛國西法典ニ比較スルニ其被告人ヲ遇スル更ニ自由ナルヿト會議局ノ設定ハ訴訟手續ニ掣肘ヲ致スナリ被告人ノ安全ヲ保スルノ目的ヲ有シタル職掌ヲ執ルヿトヲ見ルヘキナリ

第二百六十一條乃至第二百六十三條ハ豫審判事及ヒ公判廷又ハ二個ノ豫審判事ニシテ同一事件或ハ連帶ノ事件ヲ同時ニ受理シタル場合ニ於テ檢審官被告人及ヒ民事原告人ヨリ故障ヲ申立ツル所ノ管轄違ヲ規定スルモノトス豫審判事ハ此故障ヲ判決スルモ其言渡ニ對シテ會議局ニ控訴スルヲ得ヘシ而シテ若シ猶ホ故障ノ目的ヲ達スルヿ克ハサル片ハ更ニ管轄違ノ控訴又ハ上告ヲ起スヿヲ得ヘシ

第二百六十四條乃至第二百七十三條ハ豫審ノ行爲ニ對シタル申立ヲ判定ス可キ始審又ハ控訴裁判所一切ノ官吏書記豫審判事忌避ノ原因ヲ完全ニ規定シタルモノトス之ト同一ナル主義ハ訴訟手續ニ於テ必要タル可キ更改ヲ以テ公判ノ裁判權ニ適用ス可シ即チ我治罪法ニ於テ此規則ナキカ故ニ已ムヲ得スシテ民事ノ訴訟法ヲ適用スル所ノ欠典ヲ補ヒタル所ナリ但シ檢察官ハ自ラ忌避ヲ申立ツ可シト雖ヒ會テ忌避セラレサルモノトス

第三編公判ハ學理上最貴ノ主義ヲ遵奉スルヲ以テ草案第三

百零一條乃至三百七十五條ヲ見ルニ裁判權ノ三階級ニ共通ナル規則ヲ設置スルモノトス即チ其規則ハ我法典ヨリモ多數ナリ

此章ノ冒頭即チ第三百零一條ヨリ早已ニ編纂者カ或ル種類ノ不公平ニ對シテ豫防シタル注意ヲ見ルヿシ曰ク訴訟事件ハ書記局ノ簿冊ニ登記シタル順序ニ從ヒ公判ニ付スヿシ、然レトモ裁判所長ハ未決拘留ノ日數ヲ減縮スル爲メ職權ヲ以テ其順序ヲ變更スルヿヲ得重要ナル事由ノ爲ニ檢察官其他訴訟管係人ノ請求アリタル時モ亦同シト

辨護ノ權利ハ我國ト同一ノ主義ニ從ヒ之ヲ承認シタルモノトス而シテ彼一千八百三十年ヨリ一千八百三十五年ノ間ニ起リタル有名ノ訴獄ニ於テ被告人ノ暴行ニ因リテ立法者ヲシテ之ヲ創定スルノ止ム可ラサルニ至ラシメタルノ豫備法ハ草案第三百五條ニ於テ之ヲ見ル、次ニ被告人精神錯乱ニ因リ又ハ疾病ニ因リテ出廷スルヿ能ハサルトキ辨論ヲ停止スルノ必要ハ第三百六條ノ明文ニ定ムル所ナリ

凡ソ裁判長ノ職務ハ如何ナル裁判權ニ於テモ殆ト同一ニシテ未タ曾テ刑事裁判所ニ固有スル隨意ノ權ナルモノ有ラサルナリ」

第三百六十六條左ノ場合ニ於テ免訴ノ言渡ヲ爲ス可キモノトス第一法律ニ於テ被告人事件ヲ罰ス可キノ正條ナキ時、第二公訴ノ期滿免除ヲ得タル時、第三確定裁判ヲ經タル時、第四大赦又ハ特赦アリタル時、第五法律ニ於テ其罪ヲ全免スル時是ナリ而シテ此等場合ニ於テハ豫審中既ニ大審院ノ判決ヲ以テ其申立ヲ棄却セラレサルヿヲ必要トス(譯者按スルニ本

文第三百六十六條ハ第三百五十六條ノ誤カ）

第三百五十七條裁判所ニ於テハ公訴ノ裁判言渡ト同時ニ私訴或ハ被告人ノ要償ノ裁判言渡ヲ爲ス可キヿヲ定ム而シテ有罪或ハ無罪放免、免訴等ノ言渡ヲ受タル場合ヲ區別セス即チ我法典重罪裁判所ニ於テ總テ如何ナル場合モ損害要償上ニ裁判言渡ヲ爲ス可シト定メタル規則ヲ消滅セリ

被告人ノ辨護ニ切要ナル他規則ハ吾輩第三百六十三條ニ於テ之ヲ見ル可シ曰ク被告人又ハ其代人過失ナクシテ非常ノ變災厄難ニ因リ故障又ハ控訴ノ期限ヲ經過シタル場合ニ於テ其旨ヲ證明シタルトキハ期限ヲ經過シタルニ因リ失フタル權理ヲ回復スルヿヲ得但シ其變災厄難ヲ免レタルヨリ通常ノ期限内ニ其證據ヲ申立書ニ添ヘ上訴ヲ爲ス可シト檢察官モ亦同上ノ權利ヲ有ス然レトモ之ヲ實用スルハ極メテ稀有ノ事ナリトス又自由裁判ノ精神ハ第三百六十八條ニ於テ之ヲ見ル本條ハ對審裁判ニ因リ刑ノ言渡アリタル場合ニ於テ裁判長ヨリ其言渡ヲ受ケタル者ニ其費用ヲ以テ裁判言渡書ノ謄本又ハ其抜書ヲ求ムルヲ得ベキヿ及ヒ其言渡ニ對シ控訴又ハ上告ヲ爲スヲ得ヘキヿ及ヒ其期限ヲ言渡書ニ記載ス可キヿヲ規定セリ

編纂者ハ細目ノ点ニ於テモ善ク經驗ニ因リ其重要ナルヿヲ了會メ之ヲ草案ノ明文ニ載セ實際ニ因リテ其要用ナル規則ヲ承認シテ同ク之ヲ明文ニ記シ以テ其法典ノ完全ヲ致セリ」

吾輩ハ玆ニ裁判言渡書中錯誤脱漏ノ改正ニ關シタル第三百六十九條及ヒ書記ノ作リタル公判始末書ニ關シタル第三百

七十條及ヒ其次條ヲ引証シテ其不誣ヲ明ニス公判通則ニ次ク モノハ重罪輕罪違警罪公判ノ三章トス卽チ第一章違警罪公判ハ第三百七十六條ヨリ第二章輕罪公判ハ第四百六條ヨリ第三章重罪公判ハ第四百三十一條ヨリ是ナリ立法者ハ其慣用ノ注意ヲ以テ裁判管轄ニ關スル種々ノ方法ヲ列叙セリ蓋シ立法者ハ之ヲ解釋スル者ヲシテ編中分散シタル規則ヲ拾収スルニ勞セシムルヲ欲セス其人ヲシテ一目全約ヲ盡クサシメントスルモノナリ

第四百六十五條第一項重罪裁判所ノ訊問ヲ定メ輕罪裁判所、違警罪裁判所ノ訊問ハ第三百八十三條及ヒ第四百十四條ノ規定スル所ナリ只白狀ノ結果ニ關シテ異同アルノミ卽チ輕罪裁判所違警罪裁判所ニ於テ第三百八十四條ニ規定セシ如ク被告人ノ充分ナル白狀アルトキハ他ノ証憑ヲ差出スニ及ハス但シ裁判所ニ於テハ檢察官又ハ民事原告人ノ請求ニ依リ又ハ職權ヲ以テ之ヲ差出サシムルヿヲ得第三百八十五條若シ被告人ノ充分ナル白狀ナキトキハ原告証人ヲ訊問シ其他証憑アルトキハ之ヲ差出ス可シ之ニ反シ重罪裁判所ニ於テハ第四百六十五條ノ第三項假令ヒ被告人ノ充分ナル白狀アリトヽ雖モ重罪裁判所及ヒ陪審官ハ猶ホ其事件ニ付キ完全ナル取調ヲ爲サヽル可ラス

違警罪裁判ニ於テ呼出ヲ受ケタル者出廷セサルニ因リ欠席裁判ヲ爲ス可キ訴訟手續ノ條件ハ頗ル注意スルニ足ルノ特別規則ナリ第三百八十九條ニ曰ク此場合ニ於テ調書又ハ申立書アルトキハ書記之ヲ朗讀ス可シ但シ原告人ノ供述ハ起訴

人ノ請求アルニ非サレハ之ヲ聽クニ及ハス民事原告証人ノ供述ハ民事ニ付キ要求スル所ヲ證明セシムル爲ニ之ヲ聽クヿシ、出廷シタル被告證人ノ供述ハ檢察官民事原告人又ハ民事擔當人ノ請求アル時又ハ原告證人ノ供述ヲ聽キタル時ハ之ヲ聽クヿ可シ又裁判所ノ職權ヲ以テ之ヲ聽クヿヲ得

違警罪裁判所ノ裁判言渡ニ對シ控訴ヲ爲スノ權アルモノハ獨リ拘留ノ刑ノ言渡ヲ受ケタル被告人ナルノミナラス檢察官モ亦其意見ニ反シテ裁判所カ被告人ニ拘留ノ刑ヲ言渡サヽル時之ヲ爲ス可シ是レ草案ニ因リテ定リタル請求權利ノ確固タルモノナリ我法典第百七十二條ニ於テハ科料償金等ノ金額五フランヲ超過スタル時控訴ヲ爲スヲ許スノミ之ニ反シテ草案ニ於テ被告人民事擔當人及ヒ民事原告人ハ要償ノ裁判言渡ニシテ民事上終審トシテ治安判事ノ權內ニ屬スル金額ヲ超過シタル控訴ヲ爲スヲ得ヘシト定ム第三百九十六條總テ訴訟關係人ハ管轄違越權、法律或ハ廢止ノ條件ヲ以テ定メラレタル法式ヲ破リタル名目ニ因リ其利益ヲ保護ス可キ控訴ヲ爲スヲ得ヘシ第四百一條控訴ノ對手人又ハ原裁判言渡ノ幾部ニ對シ控訴ヲ爲シタル申立人ハ其裁判言渡アルマテ何時ニテモ自己ノ意見ニ反スル原裁判言渡ノ條件ニ付キ附帶控訴ヲ爲スヲ得但シ附帶ノ控訴ハ公廷ニ於テ直ニ之ヲ申立ツルヿヲ得而シテ第四百三條ニ至リ控訴ノ結果ヲ定メタリ是我法典ニ未タ其明文ヲ見サル所ナリト雖モ裁判例ノ主持スル所ノ原則ニ因リテ制定シタルモノニシテ第四百二十六條ノ輕罪事件ニ於テ亦之ヲ施行セリ

第三章重罪公判ニ於テ余輩ハ特ニ第四百五十二條其他ヲ以テ觀察ス可キモノトス曰ク裁判長ハ倍審官ヲシテ其職務及ヒ權限ヲ知ラシメンカ爲ニ陪審心得書ヲ朗讀セサル可カラサルヿノ主意ヲ含ミタルモノニシテ是裁判事件上頗ル完全ナ且ツ眞正ナル規則ト謂フ可シ、又草案ハ印刷ニ付シタル陪審心得書ヲ各陪審ニ配與セシムル所ノ好注意ヲ爲セリ

第四百五十三條陪審官ハ總テ此開聽ノ期限公正ヲ誓ヒ且ツ其宣誓書上ニ署名捺印セサル可カラサルモノトス日本草案陪審官ニ關スノ條目亦以テ見ル可シ

第四百七十五條ニ於テハ裁判長ノ職務上至大公平ヲ要スルヿヲ規定シ且ツ其ノ職務ノ概略ヲ掲ク第四百八十四條ニ於テハ期滿免除ニ付キ犯罪ニ時日分明ナラサルカ又ハ其時日ニ付キ異議アルニ非サレハ別段陪審官ニ問題ヲ付スルヿ及ハサルヿヲ記セリ、第四百八十六條ニ於テハ重罪裁判所ニ移スノ言渡書及ヒ公訴狀ニ記載シタル條件ニ係ル問題ノ外辨論中ニ發覺シタル條件ニ付キ別段ナル問題ヲ陪審官ニ付スルヿヲ定ム、第五百八條ニ於テハ重罪裁判所ニ於テ裁判言渡前陪審官ノ申立充分ナラサルヿ或ハ明瞭ナラサルヿ、又ハ矛盾スルヿアルヲ認知シタルトキハ其申立ヲ改正スル爲ニ通常ノ規則ニ從ヒ其會議室ニ退テ更ニ投票ヲ爲ス可キヿヲ言渡ス可キモノトス第四百十五條ニ於テハ總テ陪審官ヨリ被告人無罪ノ申立アリタルトキハ裁判所即時ニ無罪放免ノ言渡ヲ爲ス可キヿヲ定ム、而シテ本章ハ缺席被告人ノ訴訟手續ヲ以テ終レリ余輩ハ猶ホ第五百二十三條ニ於テ宥恕又ハ酌量減

輕ノ摸樣アルキハ被告人ノ利益ノ爲ニ之ヲ認ムルヿヲ得ルトノ一項ヲ見ル可シ(譯者按スルニ本文中ヲ四百十五條トセルハ第五百十五條ノ誤カ)

第四編ハ大審院ノ職務ニシテ其第一章ハ上告ナリ第五百三十三條(譯者按ズルニ本文ニ第五百三十三條トハ第五百三十二條ノ誤カ)ハ上告ヲ爲ス可キ原由ヲ列序セルモノニシテ其數、十五項アリ而シテ第五百三十七條ハ檢察官其他訴訟管係人モ亦公判ノ言渡ニ對シ上告スルヿヲ得ルノ場合ヲ指示セリ其他非常ノ上告ハ第五百四十條ノ定ムル所ニシテ法律ニ於テ罰セサル所爲ニ對シ刑ヲ言渡シ又ハ相當ノ刑ヨリ重キ刑ヲ言渡シタル場合ニ於テ定期內ニ受刑人又ハ其裁判所ノ檢察官ヨリ上訴スルナキヲ以テ其裁判言渡確定シタルトキハヨリ司法卿ノ命ニ依リ又ハ職權ヲ以テ大審院檢事長ヨリ何時ニテモ非常ノ上告ヲ爲スヿヲ得ルモノトセリ、又第四百四十一條ニ於テハ法律ニ於テ罰ス可キ所爲ニ對シ無罪放免、免訴又ハ相當ノ刑ヨリ輕キ刑ヲ言渡シタルニ因リ左ノ場合ニ於テモ大審院檢事長ヨリ非常ノ上告ヲ爲スヿヲ得第一裁判官又ハ陪審官賄賂ヲ收受シ又ハ受收ス可キヿヲ承認シタル時第二裁判官又ハ陪審官ニ對シ暴行又ハ脅迫ヲ爲シタル時、第三証人、鑒定人、通譯人又ハ調書ヲ作リタル官吏賄賂暴行又ハ脅迫ニ因リ詐僞ノ申立ヲ爲シタル時即チ是ナリ

第五百四十二條ニ於テ大審院檢事長ハ同一ノ事件ニ付キ數箇ノ裁判又ハ同一ノ裁判ニ付キ數箇ノ條件抵觸スル時モ亦非常ノ上告ヲ爲スヿヲ得ト爲ス此非常ノ上告ハ通常ノ上告

ト異ニシテ故障控訴ヲ受ク可キ判決ニ對シテモ亦何時ニテモ之ヲ爲スヿヲ得可シ、又第五百四十條ノ場合ニ於テ大審院ハ原裁判言渡ヲ破毀シ更ニ同院ニテ裁判言渡ヲ爲ス可シ、而シテ第五百四十一條ニ豫定シタル場合ニ於テ法律ノ点ニ付キ原裁判言渡ニ瑕瑾アリト認メタルトキニ非サハ同院ニテ直ニ裁判言渡ヲ爲サヽルヿト爲ス第五百四十三條ニ於テハ嘗テ前ニ言渡シタル自由奪却ノ刑ハ後ニ新ニ言渡シタル刑期中ニ算入スルノ特別規則ヲ定メリ

第五百五十二條及ヒ第五百五十三條ニ於テ上告棄却ノ場合ハ限定アリ而シテ特別ニシテ且ツ迅速ナル訴訟手續ノ事項タルモノナリ

余輩ハ大審院ニ於テ其掵事長ヨリ非常ノ上告ヲ爲シタル場合ニ於テハ再ヒ之ヲ他裁判所ニ移スヿナク殆ト一切同院ニテ直チニ判決スルヲ見ル例ヘハ第五百六十一條ニ於テ被告人有罪ナリト認メラレタル事實ニ付キ擬律ノ錯誤アルヲ以テ原裁判言渡ヲ破毀シタル時ノ如キ第五百六十二條陪審官ヨリ有罪ナリトノ申立アリタル後免除ノ原因ヲ誤認シテ公訴ヲ受理スヿヲ爲シ被告人放免ノ言渡ヲ爲シタルヲ以テ原裁判言渡ヲ破毀シタル時ノ如キ大審院自ラ直ニ相當ノ刑ヲ言渡スヿヲ可キモノトス然レトモ第五百六十二條ノ第二項若シ輕罪又ハ違警罪ノ裁判所ノ判決ヲ破毀シタル時ハ其事件ヲ他ノ同等ナル裁判所ニ移スヿ可シ日等竟草案ノ精神ハ明白ニシテ單ニ法律ヲ適用スルノミヲ以テ之ヲ知ルヲ得ヘシ即チ其原裁判破毀ノ後或ハ之ヲ移スノ無用ナルカ故ニ大審院自ラ之ヲ判決スルモノナリ、違警罪裁判所及ヒ輕罪裁判所ニ於テ公訴ノ

受理ニ對スル上訴ハ事實ヲ審理スルヿヲ妨クルカ故ニ勿論之ヲ他ノ裁判所ニ移サヾル可ラス然レ𪜈重罪裁判所ニ於テ問題ニ對シ陪審官ヨリ罪狀上ニ關スル確答ヲ爲シタル以上ハ事實ノ審理ハ充分ナルヲ以テ受理如何ノ点ノミ大審院ノ判決ス可キ所ナリトス

大審院ノ判決ハ破毀ノ始メヨリ確定裁判ノ効ヲ有スルモノトス、第五百七十條ニ曰ク大審院ヨリ送付ヲ受ケタル裁判所ニ於テ該院ノ判決ニ係ル原由ニ付キ其判決ニ反シ管轄違ナルヿヲ言渡シ又ハ公訴受理ス可ラサルノ申立ヲ允許シタルトキハ裁判ヲ拒ムノ罪アリトス

第五百七十三條ニ於テハ大審院ノ欠席裁判ニ付故障ヲ訴サスト雖𪜈該裁判ヲ爲ス可キ時ハ趣意書又ハ報知書ヲ適法的ニ缺席人ニ送達スルノ方法ヲ確實ナラシメシカ爲ニ或ル擔保ノ規則ヲ定ム又第五百七十七條ニ於テ訴訟管係人ノ哀訴ヲ評ス」著明ナル規則ハ第五百七十五條ナリ曰ク大審院ニ於テハ第五百三十二條第五百四十條第五百四十一條第五百四十二條ノ規則ニ因リ原裁判言渡ヲ破毀シタル場合ハ於テ原裁判官ノ重大ナル過失或ハ怠慢アルヿヲ認知シタルトキハ檢事長ノ意見ヲ聽キタル上ニ事件輕重ニ從ヒ其裁判官ヲ論告又ハ譴責スルヿアル可シ但第五百四十一條ノ場合ニ於テ刑法ニ從ヒ刑ノ言渡ヲ爲スノ妨碍トナルヿ無カル可シ、又上告期限ヲ經過シタルニ因リ原裁判言渡ヲ破毀スルヿノ能ハサル場合ト雖𪜈大審院ニ於テハ檢事長ノ請求ニ依リ前項ノ規則ニ從ヒ原裁判官ヲ譴責スルヿアル可シト大審院カ諸法官ノ上ニ

臨ミ廣大ナル權力ヲ有スルヲ見ル可キナリ」

第二章再審ノ訴ニ於テ余輩ハ第五百八十二條ヲ表示セサル可ラス佛蘭西ノ法律ハ之ニ關シテ三箇ノ場合ヲ定メタルモ本條ハ更ニ他ノ二箇ヲ附加ス即チ其一ハ定マリタル場所及ヒ日時ニ重罪又ハ輕罪ヲ犯シタル名目ヲ以テ刑ノ言渡ヲ受ケタル場合ニ於テ犯罪アル以前ニ作リタル公正ノ証書ニ依リ當時其罪ヲ犯スヿ能ハザル遠隔ノ地ニ在リタルヿヲ証明シタル時、第二ハ裁判ニ干預シタル裁判官又ハ陪審官賄賂ヲ收受シ又ハ收受ス可キヿヲ承諾シタルノ罪ニ因リ刑ノ言渡ヲ受ケタル時但シ刑ノ言渡ヲ受ケタル者自カラ賄賂ヲ行フヿタル場合ハ此限ニ在ラス余輩ハ實ニ從來佛蘭西立法者カ斯ル規則必要ヲ發見スルナク却テ日本草案ニ創定セラレシヲ祝スル者ナリ

第五編ハ裁判執行復權及ヒ恩赦ナリ余輩ハ既ニ草案ニ於テ我法典ト同シキモノヨリモ寧ロ其異ナルモノヲ舉示セリ今又第六百二十八條ヲ觀察ス可シ本條ハ內地ノ監獄及ヒ其他ノ處刑場ハ內務卿ノ管轄ニ屬スルノ事項ナリ即チ是我佛國ノ現狀ニシテ世人ノ知ル如ク近年痛シク駁擊セラルヽ所ナリ、又第六百二十九條ニ於テハ我法典ノ如ク要用ナル制度タル所ノ既決犯罪表ヲ作ルヿヲ定ム第六百四十五條刑ノ恩赦或ハ輕減ノ願ハ刑ノ言渡アリタル三日內於テ其裁判官及ヒ陪席官ヨリ之ヲ爲シ又何時ニテモ刑ノ言渡ニ立合タル檢察官又ハ監獄長ヨリ之ヲ爲スヿヲ得又司法卿ハ之ヲ爲サント欲スルトキハ何時ニテモ恩赦或ハ輕減ノ願ヲ皇帝ニ奏請スルヿ

ナ得但シ此等ノ場合ニ於テ受刑人ハ謹慎ヲ守ラサル可ラス
是實ニ日本草案特別ノ規則ニシテ我法典ニ於テ見サル所ナ
リトス」

刑法纂評大尾

明治二十年二月一日版權免許
明治二十年三月　出版

（定價　金五十錢）

譯者　東京牛込區通り寺町二十九番地　俣野時中

出版人　東京々橋區三十間堀二丁目九番地　片岡忠三郎

發兌　東京々橋區三十間堀二丁目一番地　泰山書房

府下大賣捌所

京橋區銀座四丁目　博聞本社
日本橋區西河岸町　須原屋鉄五郎
神田美土代町四丁目五番地　明法堂
京橋區彌左衛門町十五番地　知新社
京橋區彌左衛門町十五番地　時習社

各府縣大賣捌所

高知縣高知種崎町二百一番地　澤本駒吉
宮城縣仙臺國分町　伊勢安右衛門
大坂備後町四丁目三番地　岡嶋支店
廣嶋縣廣嶋大手町二丁目　早速社

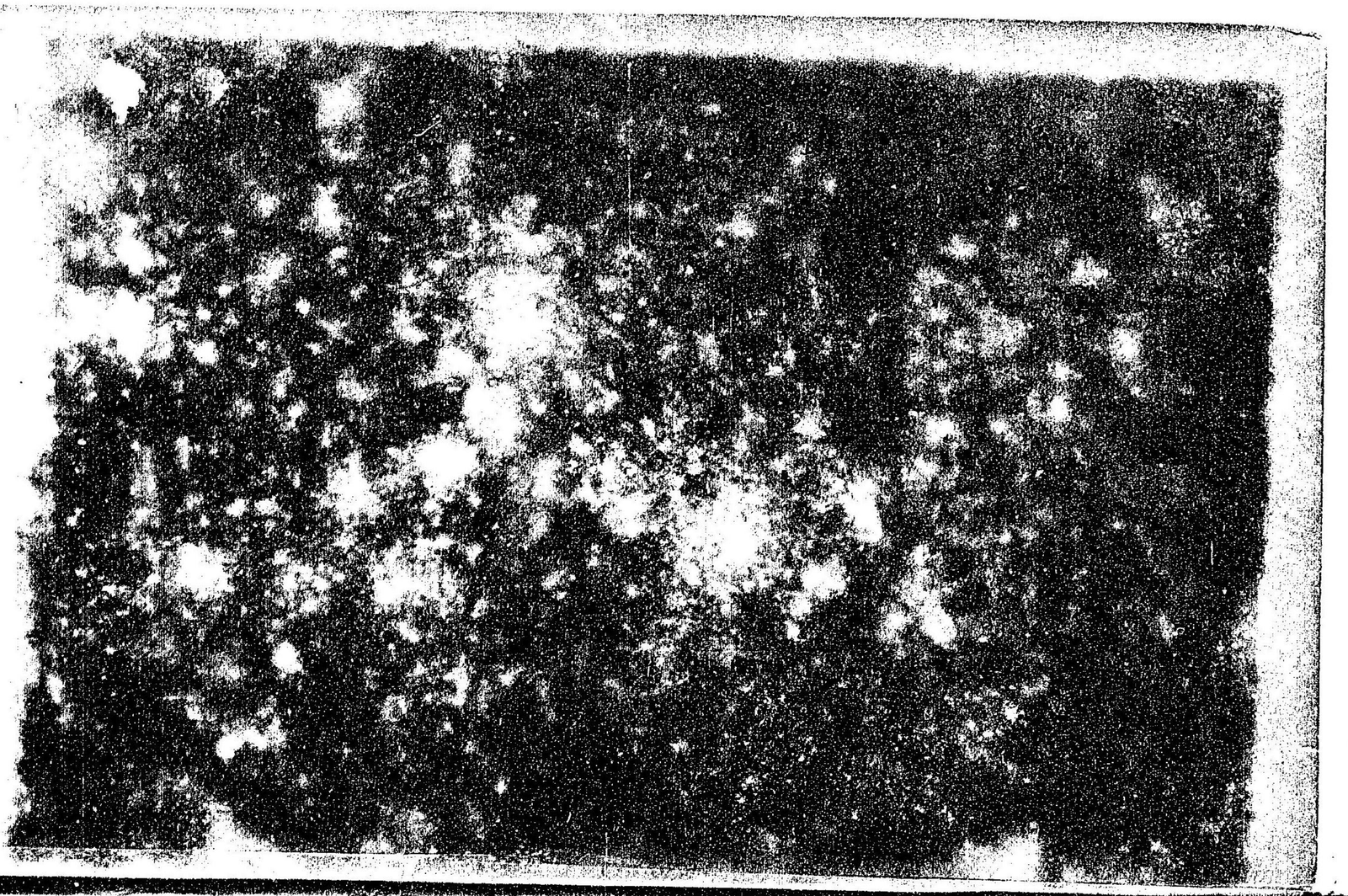
1427
26

26
127

036128−000−1

26−127

日本刑法纂評

ハメル／等著

M20
BBP−0788